

《演奏・研究活動報告》

(令和5年度)

2023年度 研究活動報告

猪狩 裕史

博士論文執筆に向けた活動

博士論文のテーマである、うつ傾向にある若者に対する遠隔音楽療法モデル構築に向けて、インテグレイティブ・レビュー（Integrative review、統合的レビュー）を実施している。Psycinfo、CINHAL、Pubmed のデータベースから、関連する文献を選択基準と除外基準に照らしながら選択し、Carroll と Nuro（2002）によるプロトコル開発の枠組みを用いて情報の抽出を行っている。

遠隔音楽療法モデル構築に向けた技術的研究

実際に遠隔音楽療法を実施することを想定して、必要な機材の設定について、遠隔音楽療法やレッスンを行っている Music Fits Japan の細江弥生氏よりコンサルティングを受ける。コンサルティングの内容から、必要な機材の購入を行った。

Guided Imagery and Music（GIM、音楽とイメージ誘導法）の研究

GIM フェローの小竹敦子氏より、GIM プログラムの「深層バッハ」の体験的演習を行う。深層バッハのプログラムは、座学で学んだ時は、防衛を破壊する力強いプログラムという認識があったが、体験を通して、意外にも染み入るように聞こえるものだとの気づきを得た。

2023年度 研究活動報告

上田 仁

金管アンサンブルの可能性の追求と レパートリーの開拓

Pursuing the possibilities of brass ensembles and developing repertoire

2023年度の研究テーマを上記のように掲げ、春学期は予算の確保、コンサートの計画、楽譜の手配などの時間に充て、秋学期からは名古屋音楽大学管楽合奏の授業と連動し、練習を行なった。

大編成金管アンサンブルは1960年代にイギリスのトランペット奏者フィリップ・ジョーンズの呼びかけにより、フィリップ・ジョーンズ・ブラス・アンサンブル（以後PJBE）を発足させた事に起源する。

当初は屋外（ストリートミュージシャン）で演奏している！と言われていたように、未だ金管楽器クラシック演奏楽器としての認知は極めて低く、まずは演奏曲、つまりレパートリーの開拓から行わねばならなかった。

それについてはPJBEのメンバーである、エルガー・ハワース、レイモンド・プレムルらが曲を書いたり、レコード会社DEKKAのプロデューサー、クリス・ヘイゼルが名曲「3匹のネコ」を書いたりして、大編成アンサンブルのレパートリーの構築に大きく貢献した。

23年前より元東京交響楽団首席トランペット奏者であった佐藤友紀氏率いるARK BRASSがこのPJBEへのオマージュとしてCD制作、コンサートツアーを展開しており、現在の日本の金管楽器奏者のレヴェルの高さを証明しているが、この事から見てもPJBEの功績の大なる所は現在まで継承されているレパートリーの構築である事は間違いない。

PJBEの唯一の失敗としてはその編成であると考えている。

PJBEはトランペット4、トロンボーン4、フレンチホルンとテューバが1ずつの合計10名の編成である。

トランペットが4人という数はフルオーケストラにおいても必要な数ではあるが、上下一対でハーモニーを作るフレンチホルンに一人を譲り渡した方が良いサウンドを作り出す事が出来る。

またトロンボーンが4人というのは他の楽器に対して音量バランス的に明らかに過剰な

数である。フルオーケストラでもバストロンボーンを含め3人しか必要とせず、4人必要な場合はコントラバストロンボーンという特殊な楽器、あくまでスペシャルな状況下でないとトロンボーンセクションが4になることはない。

おそらく別で存在するトロンボーンカルテット（四重奏）をそのままPJBEに収容してしまおう、との考えからだと推測するが、例えばその内の1人をユーフォニウムに置き換える事でさらに多彩なサウンドを作り出す事が出来るようになる。

金管十重奏で理想的な楽器編成を考えるならば、トランペット3、トロンボーン3、フレンチホルン2、ユーフォニウム、チューバそれぞれ1ずつの計10人というものになる。

時を同じくしてカナダのロチェスターフィル（オーケストラ）の金管奏者たちがあつまりカナディアンブラスを立ち上げた。

こちらはトランペット2、フレンチホルン、トロンボーン、チューバの金管五重奏で、メンバーそれぞれが確かな演奏技術を持っている事もさることながら、ルーサー・ヘンダーソンの様な本格的な作曲家をアレンジャーに迎えた事が特記すべき事象である。

オーケストラの中にユーフォニウムが存在していない事から、カナディアンブラスにもユーフォニウムが存在しないが、トロンボーン奏者ユージン・ワッツが持ち替えて演奏する事もある。

日本の吹奏楽人気はアフターコロナでも衰えを見せず、夏は吹奏楽コンクール、冬はアンサンブルコンテスト、と一年に渡り活動のモチベーションには事欠かない。今回の研究はアンサンブルに関しての事なので、アンサンブルコンテストについて触れるが、日本のアンサンブルコンテストの参加上限人数は8人と決められており、PJBEのレパートリーをそのまま演奏する事が出来ない。またカナディアンブラスのような五重奏でコンペティションを戦うにはかなりの演奏スキルを要し、特に楽器を始めて2から5年間の中高生の平均的な能力ではほぼ不可能な演奏技術が必要になる。

これらの理由から日本のアンサンブルコンテスト用には、日本人の作曲家たちが協力し、あるいはこぞって、優れた金管八重奏曲が提供されつつあり、私に関わる別のプロジェクトではこれら金管八重奏曲のレパートリーの開拓というものもある。

ここに来てようやく本題に戻るが、ここまで金管アンサンブルの歴史に触れて来て分かる事は、編成やレパートリーはそれぞれの環境や母体、あるいはコンテストの規定やルールによって変化する、という事である。

今回、湯浅篤史先生のさまざまな大編成の金管アンサンブルに取り組む事になったのは、前述の市販の金管アンサンブル楽曲では音楽大学生が取り組むに足るレヴェルのものが用意されていないという事からである。

市販の金管アンサンブル楽曲は楽譜を売るという目的から中高生のレヴェルに合わさざるを得ず、どれもが技術的に簡単に出来ている事が多いのが現状である。

その点、湯浅篤史先生の編曲はこれまで彼が開催してきたプロの演奏会の為に書き下ろされたものばかりであり、必要とされる演奏技術、表現スキルはとても高い所に設定されている。

秋学期には名古屋音楽大学の管楽合奏という授業の中でこれらの楽曲練習に取り組んだ。最初は譜読みから始め合奏が成り立つ所まで読み進んだタイミングでアンサンブルのコツやそれぞれの楽曲に相応しいアーティキュレーションやフレージングを学んだ。12/25の18:30からは授業の成果披露として試演会を行い、スターウォーズ組曲のI,III,Vとグレンダールのトロンボーン協奏曲を試験した。3/13の本公演では菅貴登がトロンボーン協奏曲を演奏するが、試験会では3年生後藤莉遠さんがトロンボーンソロを演奏した。

1/21、22は事前練習としてアレンジャー指揮者の湯浅篤史先生に来て頂き、本公演のメンバーが参加しリハーサルを行った。リハーサルはユーモアを交えながら、楽曲についての理解や、今回のコンサートではどういう事を表現したいかなどを確認しあった。

演奏メンバーは名古屋音楽大学の教員、東京や名古屋で活躍するプロ奏者、卒業生、学生で構成され、教員やプロ奏者の演奏スキルを現場で伝授する機会したいと考えている。

本公演は3/13、名古屋音楽大学内成徳館12階ホールで開催予定。

2023年度 演奏活動報告

大岡 訓子

2023年9月10日(日) 13:30 開演 電気文化会館 ザ・コンサートホール
「15th ピアノコンサート エクセレント」

毎年開催している卒業生との演奏会にて、クラブサンの小品3曲を演奏した。クラブサンの作品をピアノで演奏する際には繊細なタッチで弱音の響きを大切にしながら、バロック様式を感じることが重要である。

一つ眼巨人 J.P. ラモー

Les cyclopes (Rondeau) は、クラブサン曲集と運指法 第2番(第3組曲)であり、ギリシャ神話に出てくる怪物の意味がある。この作品にはテクニク的な要素が多く含まれており、連打や跳躍(音程)が多く、トッカータ的な作風である。ニ短調。

エジプトの女 J.P. ラモー

L'Egyptienne は、新クラブサン組曲集 第2番(第5組曲)であり、下降する分散和音で構成されており、技術的な特徴を持っている。二部形式によるト短調-変ロ長調-ト短調となっており、装飾音による色彩もありながら、音楽的な内面を感じさせる。

神秘的な防壁 F. クープラン

Les Baricades Misterieuses は、クラブサン曲集 第2巻 第6曲第5番。
バス進行を中心に、和声とともに4声が絡み合うような作風で、展開部などで大きく曲想が変わることのない作品である。優雅なエスプリを感じさせる。変ロ長調。

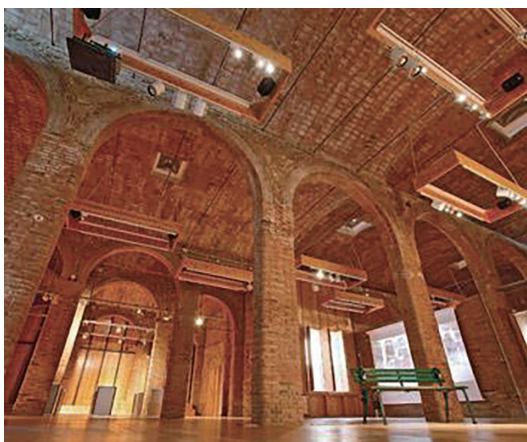
2023年度 研究活動報告

スペイン、レウス市主催 音楽フェスティバル CONTEMPO[R]AN[EUS] 20[23] : ”REUSonance “ for trumpet solo and live-electronicsの 初演について

小櫻 秀樹

2023年10月26日にシンガポール航空にて Barcelona まで Milano を経由して飛んだ。空港から Renfe (スペイン国鉄) で Barcelona -Sants 駅まで、Sanst 駅で乗り換え Reus までの長い旅であった。Reus は Antoni Gaudí の生まれ故郷として名高い、カタルーニャ州タラゴナ県にある古くからワインと蒸留酒の重要な生産地である。

私の初演作品は、Reus 市中心部にある『Centre d'Art Cal Massó』というスペースで演奏された。この Centre d'Art Cal Massó は実験的芸術かつ学際的イベントを行うためのスペースであり、100年以上前に建てられた古い酒造工場を再利用し、現代芸術文化の新しい潮流を発信することを目的として、Reus 市によって運営されている。



私はフェスティバルからの委嘱を受け、トランペットとエレクトロニクスのための新作『REUSonance』を書いた。タイトルは Reus と共鳴を表す英単語、resonance をかけたものである。

フェスティバルではスペインで著名なサクソフォン奏者の Joan Marti Frasquier がディレ

クターを務め、トランペットソロは Carles Martí Frasquier であった。演奏会にはスペイン、カタロニア州出身の著名な作曲・演奏家が集った。

私は数年前よりこの MAX を用いた芸術作品の創作に集中し、さまざまなソロ楽器を用いたライブ・エレクトロニクス表現を題材にした創作研究を行っている。

MAX とはビジュアルプログラミング言語の一つで、それぞれが機能を持ったオブジェクト同士を「パッチ」と呼ばれるコードで繋いでいく手法のプログラミングである。『REUSonance』は、カルフォルニア大学バークレー校の Center for New Music and Audio Technologies によって開発されたエクスターナルオブジェクト (Max アプリケーションの機能を拡張できるようになっている) "resonator~" 使い、トランペットにワイヤレスマイクを取り付け、音を直接マイクで拾い、それに電氣的な変調などの操作を与えて、その場で電気処理を行う、つまりこの作品ではピッチによって反応する resonator を作成し、delay (音を入力した後に、その音を遅らせることで、音が重なり合って聞こえる効果を作り出すエフェクト) とのコンビネーションを使用した。

トランペットパートは、奏者が演奏すべき音は楽譜により全て記譜されている。ただし、1-10 までのセクションに分かれており、それぞれの section ごとにおおよその演奏時間が明記してある。演奏者はストップウォッチを見ながら section ごとの演奏時間内で、A から E までの各パートを、演奏順序自由、また繰り返しも自由に即興的に演奏する。例えば、A-B-C-D-E-A-B と演奏しても良いし、B-B-D-C-A-E のように演奏しても差し支えない。ただし、スコアに書かれた音は少なくとも 1 回は演奏することが義務つけられている。演奏者にはトランペットの高い演奏技術のみならず、即興的に電子音響の即興を聴きながら演奏する高い即興性も求められる。私は舞台袖で MAX をその場で操作しながら、演奏に合わせて、"Delay" "Resonator" を使い分けながら電子音とリアルタイムに作り上げていった。

トランペット・電子音響パートともに即興ベースで音楽が進むので、ほぼ厳格な意味合いの再現不能な不確定性の高いサウンドをライブ中でどのように練り上げていくか、が実験的で、刺激的であった。このコンサートは何よりも演奏者が素晴らしく、精巧なテクニクと多彩な音楽性に圧倒された。Max プログラムは十分に改善の余地ありであった。特に、Delay 機能を 2 つしか持たせてなかった、細かい調整ができず、結果、常に似たような、そしてサウンドを生成したことがリズムの芯をやや不安定した感が否めなかった。このプログラムをさらに発展、改良して、次の公演に臨む心構えである。

REUSonance スコア

section I **REUSonance**
for trumpet:

$\text{♩} = 60$
plunger + poco a poco mute

A

B plunger

Trumpet in C

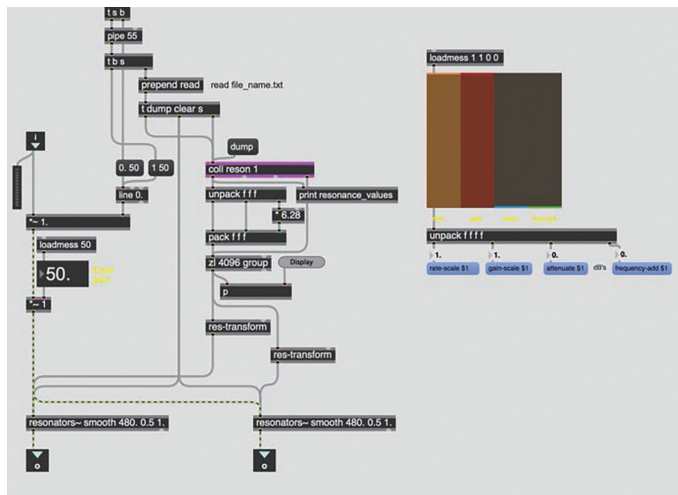
C

D

E

Electronics

Max 8 patch の抜粋



2023年度 演奏活動報告

佐藤 恵子

2023年4月23日（日） 13:30 開場 14:00 開演

ハーモニーホールふくい小ホール

めいおん Fukui 第15回演奏会

〈伴奏〉小林史子（ソプラノ）

最後の陶醉

レスピーギ作曲

母の教えたまいし歌

ドヴォルザーク作曲

藤の花

團伊玖磨作曲 太木実 作詞

さびしいカシの木

木下牧子作曲

やなせたかし作詞

歌劇『アドレアーナ・ルクヴルール』より

私は創造の神の僕

チレア作曲

2023年5月26日（金） 17:30 開場 18:00 開演

ザ・コンサートホール（電気文化会館）

愛知ロシア音楽研究会第14回演奏会

「ラフマニノフ生誕150年記念」

〈ソロ〉

「幻想的小品」ト短調

「幻想的小品集」op.3-1 〈エレジー〉 op.3-3 〈メロデー〉 op.3-4 〈道化師〉

2023年12月9日（土） 16:30 開場 17:00 開演

ザ・コンサートホール（電気文化会館）

愛知ロシア音楽研究会がお届けする

【ロシア民謡 万華鏡 2023】

〈ソロ〉

ロシア民謡「なだらかな谷間にそって」変奏曲

グリンカ作曲

黒い瞳による幻想曲

クロマコフ作曲

2024年2月14日（水） 17:45 開場 18:15 開演

ザ・コンサートホール（電気文化会館）

ポリオ撲滅チャリティコンサート 学友による 2024 年

「バレンタイン♡コンサート 大切なあなたに」

〈伴奏〉小林史子（ソプラノ）

二つの歌 はる 梅雨 小櫻秀樹作曲

〈連弾〉松下寛子（pf.）

スラブ舞曲 op.46-1.3 ドヴォルザーク作曲

2023年度 演奏活動報告

清水 皇樹

私はここ数年来、ピアノ指導法講座、ピアノ演奏理論という授業の充実のために、1年間色んな年齢層（小学生～大学生）の生徒を対象にして毎週レッスンをし、その積み重ね、成果を年末の演奏会で研究発表することを続けている。

現在、ピアノ演奏理論、ピアノ指導法講座は主に学部の二年生、三年生を対象に行なっている。

ピアノ演奏理論では、私は毎年ショパンのマズルカを取り上げ、マズルカ独特のリズム（マズール、クヤヴィアク、オベレク）を習得させるとともに、ショパンのテンポバートや歌い方、奏法等を学生に学ばせている。

その中で、今年最も力を入れたのが、自分が出した響きにいかに関心を傾けるか、ということ。どうしても、指を速く正確に動かす事に神経が行き過ぎて、響き、正確に言えば、響きと響きの間をじっくり聴くという事が疎かになりやすいと感じている。

普段のレッスンでは、一つ一つの音をゆっくり聴く、耳を傾けるということまではなかなか行きつかない。

そこで90分の授業の中で、皆でじっくり響きに耳を傾け、聴くことを徹底した。

音には方向性があり、歌、フレーズもある。

授業の中で、それがどういう方向に向かっている響きなのか、どのようにフレーズとして歌わせたらいいか、弾いてる学生にはもちろん、聴いている学生にも問いかけている。

問いかけで、響きに対して改めて意識させることにもなり、学生の演奏も変化していると感じる。

ショパンのマズルカは、楽譜上はそんなに難しくはなく、また曲も短いので学生の負担にはなりにくいと思われる。

音の数が少ない中で何を語っているのかを楽譜から探さなくてはいけない。

正しく「詩」のようである。

行間を読みとるのと同じ。

一つ一つの音は大事だが、2音間の間をどう感じ、

どう聴くかということに意識を向けることが大切である。

ショパンのマズルカは技術的には子供でも弾ける曲も多く、ピアノ指導法講座においてもマズルカはいい教材になっているものと思われる。

マズルカの演奏法をしっかり身につけていれば、子供を指導する立場になっても、スムーズに正しい指導がしやすくなる。

また、マズルカのリズム感を習得するのは、非常に難しい。マズルカはポーランドの民族舞曲である。例えばショパンの「マズール」というリズムはシンプルでありながら、2拍目の微妙な間を取り、3拍目に軽いアクセントがつくことが多いが、そのつけ具合が非常に難しい。

しかし、将来学生が子供にマズルカを指導することになったら、この知識と奏法は絶対に必要である。

このように、ピアノ演奏理論とピアノ指導法講座は密接に繋がっており切り離すことは出来ない。

私は常々、良い耳を作ることはとても大事なことと考えている。演奏家になる者はもちろん、ピアノの指導者になる者にとっても、良い耳を持つことは必要不可欠である。

美しく音楽的な響きに耳を傾け、聴き分けることは、ピアノ指導法、ピアノ演奏理論の授業の中で、今年度私が最重要課題として考えた事項である。

そのように理想を掲げて授業を行うのだが、私が実際に幅広い年代や能力の生徒を沢山持ち、多くの指導経験がなければ、このような授業を充実して行うことは不可能である。

そこで、今年度も12月27日に伏見の電気文化会館のザ・コンサートホールを取り、そこでの門下生ピアノ演奏会を目標に、1年間の私の指導法の成果をここで発表し、その結果をフィードバックすることにより、次年度の授業充実に役立てようと研究計画を立てた。

小学生の子供から、中学生高校生、そして本学の学生までのレッスンを積み重ねてきて、やはり痛感するのは、生徒一人一人が主体的に音楽的で美しい響きを作り出す事の出来る

耳を持つ重要性である。

そして、それは小さければ小さいほど効果的であるという私なりの結論である。小さな時に徹底して響きに耳を傾ける習慣をつけておけば、その感覚は決して失われるものではない。

かえって、中学生高校生からその訓練をさせても、非常に手こずる。

耳の訓練は早ければ早いほどいいのではないか。

ソルフェージュ教育もその一環である。

本学の学生が、将来演奏家になるにしろ、指導者になるにしろ、良い耳を作ることが、いかに大切かを今回も痛感した。

また、ピアノだけでなく声楽や弦楽器等にも触れている子供達は、レッスンでも応用力が高く、

より音楽的な演奏をする生徒が多かった。

そのことも本学の学生にも伝え、自らが学生時代にピアノ以外の楽器に触れることが大切であることを認識させることも出来た。

学生もその門下生演奏会で自分が演奏するだけでなく、他の人の演奏も聴くように指導しているので、理解しやすいと思われた。

しかし演奏会を聴きながら感じたことは、響き自体にもっとリアルな感情を乗せる奏法、或いはその指導法についてはまだまだ今後の課題であり、終わりのない芸術の深さも改めて感じているところである。

来年度からも引き続きこの研究を更に深めていき、更なる本学の教育の充実に努めていきたい。

2023年度 演奏活動報告

高藤 摩紀

今年度はコロナの規制もなくなり、演奏活動も自由にできるようになった。
今年度行った主な演奏活動を報告する。

4月30日 フォーラム 21 少年少女合唱団 定期演奏会

稲沢文化会館

中川いづみ作曲 「春光悔過」 マリンバ

新美德英作曲 「生まれてから」 ヴィブラフォン、打楽器

5月28日 湯山玲子プロデュース 森の中のピアノ 坂本龍一の音楽と共に

宮崎県諸塚村 森の中のピアノ特別会場

Steve Reich “Nagoya Marimbas”

Anna Ignatowic “Passacaglia”

Eric Zak “Chasing the Caribou”

Steve Reich “Clapping Music”

坂本龍一 “Aqua”

クラシック音楽を野山に放つ！というコンセプトの湯山玲子氏のプロデュースの「爆クラアースダイバー」を全国各地で開催しているリスニング体験を、坂本龍一氏が森林保護活動のMore Treesを諸塚村でも生前行っていたことで、宮崎県諸塚村で開催された。

6月18日 New Music from Meion

同朋学園名城キャンパス・ホール

大石彩音 「人魚の歌」

9月30日 「ボクハツナガル」 公演

ぎふ清流文化プラザ長良川ホール

愛 wish プロジェクト主催のボクハツナガル公演にて劇伴をマリンバとジェゴッグで行った。

10月16日～19日 パシフィックフィルハーモニア東京 文化庁徳島公演
サン・サーンズ 動物の謝肉祭 他

12月3日 「音の木立」

同朋学園名城キャンパス・ホール

久留智之 「竹あそび1」「竹あそび2」世界初演

Ricardo Gallardo “Café Jegog” 他

名古屋造形大学と共同企画のコンサートにおいて、特任教授の久留智之氏の新作を初演した。

12月9日 「クリスマスコンサート」

日本キリスト教団 守山教会

Matthias Schmitt “Marimba Chant”

讃美歌 他

中学校の時の恩師の小板橋秀之先生の教会でクリスマスコンサートをした

1月21日 亀山佳音マリンバリサイタル

めいおんホール

Steve Reich “Nagoya Marimbas”

大学院生の亀山佳音くんの学内リサイタルにおいて共演した。

1月27日 パシフィックフィルハーモニア東京 定期演奏会

東京芸術劇場

西村朗 遺作

「ピアノとオーケストラのための〈神秘的合一〉」世界初演

飯森範親指揮 パシフィックフィルハーモニア東京

2月10日 高藤摩紀 マリンバリサイタル

中部大学 三浦幸平メモリアルホール

共演 Pf 水村さおり

J.S. Bach. 無伴奏チェロ組曲 第3番よりプレリュード

Ricardo Gallardo Saeta y Burelias

Astor Piazzolla Le Grand Tango 他

中部大学主催の第90回キャンパスコンサートにおいてリサイタルを開催していただいた。

マリンバのために作曲されたオリジナル曲からに耳馴染みのある曲を織り交ぜたプログラムとした。

3月23日 いちご♡ ゴーゴーライブ (予定)

春日井文化会館

Nicolai Kapustin “Sinfonietta for four hands Op.49

IV Rondo. Presto

2023年度 研究活動報告

露木 薫

今年度もこれまでに引き続きマウスピースの研究を行った。

今年度に購入したマウスピースは以下の3点である。

シュミット USA 5G、デニスウィック SM5X、ウィリーズ 4G-5G

シュミット社 (Werner Chr.Schmidt) は古くから楽器製作の盛んな町ドイツのマルクノイキルヒェンに工房を構える創業180年の伝統を持つ金管楽器とマウスピースのメーカーである。USAモデルはBachのマウスピースに対応したシリーズのようで1 1/4G～12Cまでのモデルがある。このUSA 5Gモデルの内径は25.5mmでBach 5Gの内径と同様であり、カップの形状もほぼ同じだが、金属の鑄造から自社で行っている事、Bachのマウスピースに比べて若干のウェイトを加えている事などから、音のまとまりに優れ、ふくよかで澄み渡る音質が特徴的である。トロンボーン用として開発されているが、ユーフォニアムのマウスピースとしても十分に良さを発揮できるものと言える。

デニスウィック SM5Xはデニスウィックのウルトラシリーズ。ユーフォニアムの巨匠スティーブン・ミード氏協力の下開発されたモデルでありミード氏のオリジナルはSM3Xである。このSM5Xの内径は25.75mmでカップ内側の丸みを帯びた形状に、厚みを持ったカップ外側の重量感が特徴である。リムのエッジをシャープにすることで、パワフルかつ深みのある暖かな音色と美しい高音域を実現しているが、スタミナ面を考えると、マウスピースの唇への圧力がコントロール出来る奏法を持つ事が要求されるだろう。

ウィリーズは山梨県に工房構える日本のマウスピースメーカーである。今回購入した4G-5Gのマウスピースは通常のラインナップには無い特注の品番である。以前より5Gの口径に窮屈さを感じるが、息の量などの問題からカップ自体は大きくしたくないという要望の下でGreg Black社などでも4G-5Gのマウスピースが生産されていたが、現在では入手不可能となっている。特に日本のプロのユーフォニアム奏者の中ではBach 5Gのマウスピースは長年に亘り一番のスタンダードであり、ソロや吹奏楽の中で求められる音質の標準を創り出せるモデルともいえる。その5Gのカップの形状を生かしたまま、口径を少しだけ大きくする試みは、音量のコントロールの増大、低音域の充実感や耐久力アップに

つながる事が期待される。Bach 5 G相当のマウスピースから口径だけを少し広げてみたい奏者に勧めたいマウスピースである。カップの内径は26.00mm。

2023年度 演奏・研究活動報告

中川 朋子

2023年12月20日（水）開演 19:00 場所：名古屋・伏見・電気文化会館
ザコンサートホール

中川朋子ピアノリサイタル ピアノソロ：中川朋子

プログラム

F. ショパン：3つの練習曲

A. スクリャービン：12の練習曲 Op.8

R. シューマン：交響的練習曲 Op.13（遺作変奏曲付）

歴史上、様々な形の練習曲が作曲されたが、中でも、技巧性と詩情豊かなショパンの練習曲の登場は、練習曲に対する認識や作曲家達の注目度を一気に高めた。ショパンは「12の練習曲 Op.10」を1833年に、「12の練習曲 Op.25」を1837年に出版した。

今回のプログラム最初の曲目、ショパン「3つの新練習曲」は、作曲家モシェレスとフェティス編纂の「メトードの為のメトード」に向けて1839年に作曲され、1840年に出版された。叙情性に富み、ショパンの 高い芸術性を感じさせる3曲となっている。

1. 右手と左手が異なるリズムを同時に進行させるポリリズムの練習曲。右手はカンタービレ、左手は滑らかに淀みなく弾くことが求められる。メランコリックな曲。
2. ポリリズムで、右手はハーモニーで奏でられる。
3. 右手の上声部のメロディーはレガート、内声は軽やかに2声部を弾き分ける練習曲。

プログラム前半のメインは、スクリャービン 12の練習曲 Op.8。

スクリャービンは、初期にはロマンティックな作風とショパンの影響が多く見られることから「ロシアのショパン」とも呼ばれた。1900年頃からは、ニーチェの哲学、更には神智学に心酔し、神秘思想に基づく前衛的な後期の作風へと変容を遂げて行く。「12の練習曲 Op.8」は初期の作品で、資金援助者で楽譜出版社主ミトロファン・ベリャーエフから出版への勧めを受けて1894年から1895年に作曲された。この作品はショパンの「12の練習曲」を意識して書かれたと言われているが、スクリャービン独特の色彩やエネルギーを内包する作品となっている。

1. ショパンの「3つの新練習曲」の第2曲 変イ長調からインスピレーションを得たの

ではないかと想われる。嬰ハ長調のこの第1曲は、右手の3和音を重音の連打と単音に分解し、3連符として奏する複雑な技術を要求しており、斬新な練習曲となっている。

2. 異なるリズムを同時に進行させるポリリズムの練習曲。広い音域にわたる左手の分散和音は深い海のうねりをも想わせる。
3. オクターヴと単音を交互に弾く練習曲。両手それぞれが異なる複雑な動きを伴う。スクリャーピンは冒頭にテンペストーソ（嵐のように）と記しているが、この表記について「十分な表現ではない」と述べたとされている。不穏な空気感が漂う。中間部では憧憬にも似た歌が聞こえる。
4. ポリリズムを用いてアラベスク風に戯れる。
5. シンプルなメロディーが魅力的な曲。絶えず幅広い音域への移動が求められる。2台ピアノを1人で奏するイメージ。
6. 調性が目まぐるしく変化し、音幅の広い右手のメロディーが6度音程で旋回する。
7. 右手と左手の拍の始まりが、ずらされる（クロスフレーズ）による練習曲。闇の混沌とした不安感を抱かせる。
8. 初恋の人と言われるナターリア・セケリーナを想って作曲されたことから「ナターリアのレント」とも呼ばれる。冒頭のポルタート（スタッカートにスラーの表記）は切ない心情を伺わせる。右手は上声メロディーと内声としてハーモニーを伴う練習曲で、再現部ではポリリズムとなる。
9. ダイナミックなオクターヴの練習曲。強弱のコントラスト、感情の急激な変化を伴う。
10. 3度音程の急速で絶え間ない飛躍が求められる曲。
11. 情緒ある奥深い旋律とハーモニーは秘めた情熱を感じさせる。
12. ショパンの練習曲 Op.10-12「革命」との類似が指摘されている。ドラマティックなこの曲はスクリャーピン自身が好んで演奏した自信作であり、12曲中、最も有名な練習曲として知られている。

プログラム後半は、シューマン交響的練習曲 Op.13（遺作変奏曲付）。

シューマンは音楽評論家として練習曲の分析にも大きく貢献した。教育的な見地から自作の「パガニーニのカプリスによる練習曲」を含む、数多くの作曲家の練習曲を練習目的別に分類して論評し、練習曲への強い関心を示した。

「交響的練習曲」は1834年から1835年に作曲された。初期のシューマンに於いて、練習曲と共に変奏曲が創作の重要なテーマであった。創作過程でシューマンの構想は変遷し、曲名も草稿時は「悲愴変奏曲 ファンタジーとフィナーレ」次いで「12曲のダヴィッ

ド同盟練習曲]、「フロレスタンとオイゼビウスによるピアノの為のオーケストラ様式の練習曲」と変化した。最終的に「交響的練習曲」と題し、主題と12曲の練習曲の構成で1837年に初版された。シューマンは、この作品の理解者でイギリス人作曲家ウイリアム・スタンデール・ベネットに献呈した。初版から15年後の1852年に改訂版を出版。シューマンは2曲を削除して「変奏曲形式による練習曲」と曲名も変更した。練習曲の数曲に細かな変更を施し、更に、第12曲の練習曲は「フィナーレ」として手直しをして内容を凝縮させた。シューマンの没後、ヨハネス・ブラームスの校訂により、初版で省かれていた5曲が遺作として追加され出版された。現在では、「交響的練習曲」は改訂版に改訂版で削除された2曲と、遺作の5曲を加えて演奏される事が多い。

主題と12曲の練習曲（第3曲と第9曲を除く9曲は主題の変奏、第12曲はフィナーレ）と5曲の遺作（変奏）により構成される。シューマンはこの「交響的練習曲」と同時期に前段階ともなった「ベートーヴェンの主題による自由な変奏曲形式の練習曲」を作曲している。シューマンのベートーヴェン交響曲研究がこの作品の基礎となり、曲名の「交響的」からも「ピアノにオーケストラの効果を」という構想の意図が伺える。

主題は、草稿段階の当時にシューマンの婚約者の父親であったイグナツ・フォン・フリッケン男爵のフルート変奏曲の旋律を基にしている。この作品は、特に、バッハの「ゴルトベルク変奏曲」を想わせる第8曲など、バッハ研究も創作の下地となっている事が伺える。更に、第6曲は、同時期に並行して作曲していた「ベートーヴェンの主題による自由な変奏曲形式の練習曲」の第3曲と類似している事が、双方の楽譜から読み取れる。遺作をどの部分に組み入れるかは諸説あるが、第5曲と6曲の間に遺作の5曲を挿入した。第10曲はまさに交響的の名にふさわしくダイナミックに展開。詩的な第11曲から一転してファンファーレと共に終曲を迎える。フィナーレの冒頭にはハインリヒ・アウグスト・マルシュナーのオペラ「聖堂騎士とユダヤの女」の合唱曲「誇らしきイギリスを歌う」からの旋律が主題として用いられている。創作段階でシューマンは、フリッケン男爵宛ての手紙で「終曲は誇り高き勝利の行進としたい。更に劇的な関心を取り入れたい」と述べた。マルシュナーからの主題は変化しながらフリッケン男爵の主題と結びつき、壮大に大曲の幕が閉じられる。

今回のリサイタルは練習曲をテーマとして取り組んだ。練習曲は単に技術的向上の目的だけでなく、特に1830年代以降、作曲者独自の新しい技法を反映させた練習曲が次々と生み出された。今回のプログラムの3作品も、それぞれ作曲者の斬新な作風が凝縮された練習曲である。スクリャービンの「12の練習曲」は、演奏会で全12曲が取り上げられる事はあまり無いと言っても過言ではない。しかし、私は12曲の配列に作曲者の意図があるとの考えから、全12曲を一纏めにした構成で演奏会に臨んだ。演奏を楽しんで頂ける

ように、スクリャーピンの魅力を際立たせる工夫をしながら、練習曲としての枠を逸脱しないように努めた。「交響的練習曲」については、作品の完成までシューマンが熟慮を重ねたバリエーションそれぞれのキャラクターを生かし、多彩な音色や響きに注力した。遺作の位置について、構成の全体的バランスから第5曲と第6曲の間に遺作の全5曲を組み入れる事が良いのではないかと判断した。

おかげさまでリサイタルは、ご好評を賜り大変有難く、更に研鑽を積んで次回に備えたいと思っている。

2023年度 研究活動報告

橋本 眞介

日本クラリネットフェスティバル in 名古屋を開催して
(開催報告・効果・課題)

2023年3月12日(日)名古屋音楽大学めいおんホールにて第36回日本クラリネットフェスティバル in 名古屋を開催しました。私はこのフェスティバル実行委員長として企画・運営に大きく携わりました。前日の11日(土)に第17回クラリネットアンサンブルコンクールと抱き合わせで実施し2日間で延べ700名ほどを動員しました。メイン会場のめいおんホールでは1日中クラリネットの音が溢れ、企業展示ブース会場では動き回るのが難しいくらいの人で、まさにお祭り状態でした。

フェスティバルの開幕を飾ったのは、前日に行われたアンサンブルコンクールの各部門最高位受賞団体による演奏会です。4部門(中学・高校・一般・専門)の受賞団体の4団体が質の高い演奏を披露し最高の幕開けとなりました。

参加団体はアイリスクラリネットカルテットがプロデュースした「ラージアンサンブル、とラージクワイヤー ～クラリネットの輪を広げよう」のは発表が行われました。普段はアンサンブルは組んでいないけど大合奏で盛り上がりたいと意気込む30名が各地から集まり、練習を経て「サウンドオブミュージック」「リグディム」の2曲を披露しました。この企画はアンサンブルを組んでいなくても参加できる手軽さもあり、公募系のイベントの中でいち早く定員に達しました。合奏をしたいとうずうずしているクラリネット吹きが沢山いることを実感した企画でした。

公募によるアンサンブルステージ

公募によるアンサンブルステージはクラリネットフェスティバル恒例の企画です。今回も各地から10団体が名古屋に集結しそれぞれの思いを込めて演奏していただきました。デュオから18重奏まで様々な音色が楽しめました。私が感じたことは東海地区のクラリネット層の厚さです。演奏を思いっきり楽しむ姿にクラリネットの良さを発見した企画でした。

(株)ヤマハミュージックジャパンによる「クラリネットの音響学」

クラリネットフェスティバルならではの企画です。ヤマハミュージックジャパンの宮地氏によるクラリネット音の鳴る仕組みを構造的に紐解く講座。お昼時にも関わらず、たくさんの方が熱心に聴講していました。普段は感覚で吹いているクラリネットの響かせ方を構造的に理解することで合理的な奏法へ向かうきっかけになったのではないのでしょうか。

クラリネット協会・名古屋ステージ

1983年に発足した同協会は、東海3県のクラリネット愛好家が集まり定期的に活動を行っています。今回、全面的にご協力いただき、集客、企画へのアドバイスなどご尽力いただきました。会長の小松孝文氏は名古屋のクラリネットの発展を長年支えてきた功労者。

音大生クワイヤーによるステージ

63名の音大生が同じステージで演奏。東海地区からは愛知県立芸術大学、大垣女子短期大学、金城学院大学、名古屋音楽大学、名古屋芸術大学の5つの音大でクラリネットを学ぶ学生が一堂に会しました。リハーサルからお互いの大学との交流が生まれ、今後も連絡を取り合っていこうと、連絡先を交換する姿が見られました。今までもそうでしたが、これからも音大同士で交流をしながら切磋琢磨していくことが、クラリネットコミュニティ拡大の基礎の一つになるのではと感じました。

実行委員企画

谷口英治&後藤浩二トリオ× Clarinet Guild FANTASIA ～幻奏～スペシャルコンサートは新しいクラリネットの音楽に挑戦すべく企画しました。まずは谷口氏と後藤トリオによるジャズの世界。谷口氏の「適当な演奏をしますので真面目に効かないでください」の一言から始まった演奏は一瞬で会場の空気をリラックスした雰囲気に変えました。次に登場したのはYoutubeやTikTok等SNSで大人気のClarinet Guild FANTASIA、和の服装で音源を流しながら自由に動き回りながら視覚的にも聴覚的にも新しいスタイルで会場もとても盛り上がりました。最後にこの2団体によるコラボステージは侍風な3名が音頭を取り日本のお祭りのような雰囲気、和とクラリネットの融合を感じました。最後はSingSingSingでエンディングを迎えました。

ゲストステージ

クラリネットフェスティバルの目玉の一つです。今回は(株)野中貿易より関西フィルハーモニーの梅本貴子氏、(株)ヤマハミュージックジャパンより小倉清澄氏、(株)ビュッフエクランポンより日本クラリネット協会会長の山本正治氏、バックーンミュージカル・サービス

よりシモーネ・ニコレッタ氏、と各社から素晴らしいアーティストのステージをご提供いただきました。

ゲストアーティストによるスペシャルクワイヤー

日本クラリネットフェスティバルでは例年最後に大合奏を行っていましたが、今回はコロナのこともあり見合わせ、ゲストアーティストによるスペシャルクワイヤーで幕を閉じました。L.v. ベートーベンのアダージョ カンタービレとP. グレインジャーの羊飼いの呼び声を山本正治氏の指揮で演奏しました。

参加者数報告

第36回日本クラリネットフェスティバル in 名古屋は以下のような参加者でした。

公募企画：87名

音大生企画：63名

クラリネット協会・名古屋：20名

アンサンブルコンクール出場者 枠：8名 一般参加者 :94名

クラリネット協会会員：19名

計：372名

動画視聴者数：7010回（5月時点）

実行委員会報告〈実行委員会発足の経緯〉

実行委員会発足は2022年7月21日でした。2020年のコロナ以降、クラリネットフェスティバルは開催できない状態が続いており、ようやくウィズコロナが浸透し始めた2022年の春、名古屋でのアンサンブルコンクールの開催を提案させていただき、併せてフェスティバルもやってはどうかという私の思いからトントン拍子で開催が決まりました。この時点で動き出しとしてはかなり遅く、実行委員の7名でいろいろなことをどんどん決めていきました。実行委員は皆クラリネット奏者で、会議はほとんど夜にオンラインで行いました。オンラインミーティングはコロナ禍の遺産の中でも最良のものの一つです。

効果

〈コロナ禍でのクラリネットフェスティバル実施〉

2018年の山口以降、開催できていなかったクラリネットフェスティバルを実施できたことに大きな意味があると考えています。ACPC（コンサートプロモーターズ協会）が策定したガイドラインに沿って感染防止対策を実施しながらの開催でしたが、この規模のクラリネットのイベントを実施した実績は、次回のフェスティバル、また同様のフェスティ

バルが全国で行う起爆剤となることを期待しています。

〈地域のクラリネットコミュニティの拡大〉

通常の演奏会とは違い、フェスティバルでは様々な団体が一堂に会することもあり、相互での交流が生まれます。今も公募企画参加者は、演奏するだけではなく、積極的にコミュニケーションを取り、今後何か企画一緒に開催したり、特殊管の貸し借りをしたりと、地域のクラリネットコミュニティ拡大の場になったのではと感じています。また、前述したように音大生クワイヤーでは、コロナでまったく交流できなかった学生たちが、繋がり、刺激し合った事で、今後継続的に交流し、社会に出た後も仕事のやり繰りや、演奏活動などで協力してくれることを期待しています。

〈新しいクラリネットの音楽の発見〉

バーチャルの世界から飛び出してきたような Clarinet Guild FANTASIA ～幻奏～のパフォーマンスは今までにない新しいクラリネットの表現方法ではと感じています。日本が誇るアニメ文化はそのイラストのタッチやキャラクターの個性が広く世界に受けているのではないかと個人的に考えています。Clarinet Guild FANTASIA ～幻奏～もアニメの世界から飛び出してきたようなキャラクターがパフォーマンスをしますが、その表現ツールがクラリネットであり、しかも、服装は和装でどこか日本臭さを感じます。かつてシンガポールで英語が長い時間をかけてその国の文化を反映した Singlish と変化したように、日本でもクラリネットが日本の文化の影響を受けて Japarinet と進化してきているのではないのでしょうか。

課題

〈社会連携の必要性〉

今回のクラリネットフェスティバルの目標の一つに「クラリネットとその音楽の普及」があります。フェスティバル当日はとても盛り上がりましたが、アンケートによると、フェスティバルに来場したきっかけは8割が参加者からの声掛けでした。これはフェスティバルが内輪の盛り上がりでもあった事を少なからず意味します。名古屋市をはじめとして、全国の自治体では積極的に文化振興を図ろうと助成事業を立ち上げています。しかし採択には当然ながら、地元商店街や地域の住民が参加できることが前提となってきます。また、派手な事を一回やって終わりではなく、SDGs のよう持続的に地域を活性化していくために何年か計画的に関わっていくことが求められます。クラリネットをもっと外に出す必要性を強く感じたフェスティバルでした。

〈若い世代の少なさ〉

音大生を除けば、フェスティバルへの学生（大学生以下）の参加は全体の10%以下でした。しかも学生のほとんどが前日に行われたアンサンブルコンクールから流れた方でした。開催直前に地元の中学生数人に聞いたところ、全員がフェスティバルの開催すら知りませんでした。若い世代はどのように情報を得ているのか。同じ中学生に聞いたところ、自分に興味のあることを調べ 掲示板等を見るとのこと。SNS で情報を得ているのかと思いきや、Instagram や Twitter を積極的に利用しているのはクラスでも数人だそうです。YouTube は毎日見ているようですが、若い世代の情報へのインターフェイスは常に変化していることを痛感しました。

若い世代を取り込んでいくことは必須であると考えてます。令和7年度には部活動の地移行が完了し、部活動は学校単位ではなく主に地域が担うことになる予定です。そうになると学校を通してではなく、地域を通して学生と繋がるしかなくなってしまう。その際クラリネットコミュニティが学生にクラリネットの魅力伝える拠点になるとが求められるのではないのでしょうか。

8) 今後に向けて

アメリカの発明家レイ・カーツワイル博士が提唱する、AI が人間を超えシンギュラリティは2045年と言われています。近年では秀逸な作画をAIが行い、コンテストで賞を受賞というニュースまであります。しかし、どれだけ技術が進化しても、芸術を表現して、楽しむ心は人間しか持ち合わせません。今後少子化がますます進み、AIの台頭でさまざまなものが合理化されていくでしょう。その中でクラリネットをはじめとする音楽文化をいかに継続し、次の世代に伝承していくかが課題となっていくと考えます。クラリネットをヨーロッパの楽器としてだけでなく、日本独自のものとして Japarineto 化していくかが、世界の中で日本の音楽が、きらりと光るものとして後世に残る方法の一つなのではないのでしょうか。今回の実行委員会企画がそんな日本のクラリネットの今後を予見する一石となれば幸いです。

2023年度 研究活動報告

森 雅史

- 1月22日(日) 高岡オペラプロジェクト オペラ『奥様女中』
会場：富山県高岡市生涯学習センターホール
オペラ『奥様女中』ウベルト役にて出演、公演監督（演出、字幕、キャストリングなど総合的に公演プロデュースを担当）
- 2月17日(金) 舞台監督 小栗哲家氏公開講座『舞台芸術のいこれまで 今 これから』
企画・運営
- 2月18日(土) 浜松学芸高校にて、ミニコンサート（伴奏：大岡訓子教授）と
公開レッスン
- 3月10日(金) 国立音楽大学にて、日本舞台音響家協会主催『楽器を知ろう 声楽編』
にて、研究成果共有ならびに実験参加（歌唱実施）
- 5月1日(月) 金沢 風と緑の楽都音楽祭 名古屋音楽大学シンフォニックウインズ
高岡公演 司会と歌唱（宇宙戦艦ヤマト）
- 5月2日(火) 金澤蓄音機博物館 八日市屋館長と研究課題について議論
- 5月4日(木) 金沢 風と緑の楽都音楽祭 オペラ『売られた花嫁』結婚仲介役
指揮：スワロフスキー
- 5月5日(金) 金沢 風と緑の楽都音楽祭 オペラ『ドン・ジョヴァンニ』
騎士長役 指揮：沖沢のどか
- 7月15日(土)、17日(月)、20日(木)、23日(日)
佐渡裕プロデュースオペラ『ドン・ジョヴァンニ』マゼット役
兵庫県立芸術文化センター 指揮：佐渡裕

9月29日（金）、30日（土）

音楽De祭り

メニコン HITOMI ホール

オペラ、日本歌曲、ミュージカル作品のコンサート

10月22日（日）

いしかわ百万石文化祭 2023

全国こどもオペラの祭典 オペラ『魔笛』ザラストロ役

指揮：辻博之

12月14（木）、15（金）、16日（土）、17日（日）

ミュージカル『キミのために散る』マイケル役

メニコンシアターホール葵 演出：田尾下哲ほか

【総括】

2023年度の一番大きな成果としては、『名古屋音楽大学声楽コース 学科公開講座 ヴォーカル・アカデミー 2023』を成功裏に実施することが出来たことが挙げられる
ヴォーカル・アカデミー 2023 では、

2023年4月29日（土）「成田伊美 メゾソプラノリサイタル」

2023年6月10日（土）「中山朋子マスタークラス & 英語発語法公開講座」

2023年8月27日（日）「森内剛マスタークラス」

2024年2月19日（月）「マキシム・ミラノフマスタークラス」

以上、4つの企画を実施し、大学教員、職員の多大なる協力をいただき、特にマキシム・ミロノフ氏によるマスタークラスは全国の若手歌手から受講生を集い、本学大学院生も含め非常に高いレベルの受講生と指導内容による質の高いものを実施することができた。

また、金沢の音楽祭では、本学シンフォニックウィンズとの共演や、チェコ語によるオペラにも初めて取り組むなど大きな収穫があった。個人的には佐渡裕プロデュースオペラ『ドン・ジョヴァンニ』へのマゼット役での出演は、国内外のスター歌手との共演という事でレベルの高い公演に携われたことが非常に有益だったと実感している。

現在、ミュージカルコース長でもあることから、オペラや歌曲以外のレパートリーとして本格的なミュージカル作品に出演ができたこと。名古屋で新しく誕生したホール、メニコンシアター葵での公演に参加できたことは、今後の指導に大変有意義であった。

また、2度目の採択となる科研費による研究活動は、教育と大学行政に関する業務に追われ滞りがちではあるが、研究に関連する活動としては日本音響家協会が主催するイベントに研究課題を踏まえて実際に歌手として参加したことが挙げられる。科研費研究は音響学の見地から歌声を可視化したシステムを用いた声楽指導の体系化が主としているが、蓄音機による黄金時代の歌手陣の歌声の成分分析も比較研究の題材としたことから、金沢蓄音機博物館館長である八日市屋氏との対談も有益であった。

コースならびに大学運営に携わることが増え、演奏家としての出演の機会を減らしているのが現状である。科研費応募も含め、今後は演奏以外の個人研究も積極的に実施していきたい。

2023年度 演奏・研究活動報告

森谷 真理

2023年度にソリストとして出演した主だったコンサートを報告する。

2023年1月9日 宗次ホール

「森谷真理ソプラノリサイタル」

ピアノ：山田武彦

曲目：A. ドヴォルザーク作曲 「ジプシーの歌」、M. リセンコ：ウクライナの主題「ドゥムカ・シムカ」による第2狂詩曲、K. シマノフス：「スウォピェヴニェ Op.46」、歌劇『ルサルカ』より「月に寄せる歌」、S. ラフマニノフ：「Op.4 No.4」、「Op. 21 No.7」、「Op.34 No.14」、「前奏曲 Op.32 No.5」、L. バーンスタイン作曲 オペレッタ『キャンディード』より「煌びやかに着飾って」、J. アダムス作曲 歌劇『中国のニクソン』より「私は毛沢東の妻」他

2023年2月5日 東京芸術劇場 コンサートホール

「柴田真郁 ミュージックパートナー就任記念 オペラ・演奏会形式シリーズ Vol.1 “ルサルカ”」

ドヴォルザーク／歌劇「ルサルカ」作品114

演奏会形式 原語（チェコ語）上演【日本語字幕付き】

指揮：柴田 真郁 共演：高橋 達也、砂田 愛梨、田中 由也、福原 寿美枝 女 表題役出演

管弦楽：大阪交響楽団 合唱：大阪響コーラス 合唱指揮：中村 貴志

2023年3月2日、5日 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 大ホール

「びわ湖ホール プロデュースオペラ ワーグナー作曲『ニュルンベルクのマイスタージンガー』」

指揮：沼尻竜典 演出：栗國 淳

管弦楽：京都市交響楽団

共演：青山 貴、妻屋秀和、村上公太、近藤 圭、黒田 博、大西宇宙、チャールズ・キム、チン・ソンウォン、高橋 淳、友清 崇、松森 治、斉木健詞、福井 敬、清水徹太郎、八木寿子、平野 和

2023年4月18日 浜離宮朝日ホール

「【浜離宮ランチタイムコンサート vol.225】 森谷真理ソプラノリサイタル」

【主催】朝日新聞社／浜離宮朝日ホール

ピアノ：山田武彦

曲目：ヘンデル作曲 歌劇『セルセ』より”オンブラ・マイ・フ”、歌劇『リナルド』より”私を泣かせてください”、オラトリオ『サムソン』より”輝かしいセラフィムに”、モーツァルト作曲 “静けさはほほえみつつ”、“鳥よ、年ごとに”、“すみれ”、歌劇『フィガロの結婚』より”恋人よ、早くここへ”、ラフマニノフ作曲 “美しい人よ、私のために歌わないで”、“ここは素晴らしい場所”、ジョルダナーノ作曲 歌劇『アンドレア・シェニエ』より”亡くなった母を”他

2023年5月7日 アイプラザ豊橋 大ホール

「三河市民オペラ 2023年公演 ウンベルト・ジョルダナーノ作曲『アンドレア・シェニエ』

全4幕 一原語上演」共演：樋口 達哉、上江 隼人、山下 裕賀、武田 美保、谷口 睦美、晴 雅彦、糸賀 修平

2023年5月20日 横浜みなとみらいホール

「日本フィルハーモニー交響楽団 第387回横浜定期演奏会<春季>」

指揮：ピエタリ・インキネン 共演：池田香織、宮里直樹、大西宇宙

合唱：東京音楽大学

曲目：ベートーヴェン：交響曲第9番《合唱》ニ短調 op.125

2023年5月21日 サントリーホール

「第400回名曲コンサート」

指揮：ピエタリ・インキネン 共演：池田香織、宮里直樹、大西宇宙

合唱：東京音楽大学

曲目：ベートーヴェン：交響曲第9番《合唱》ニ短調 op.125

2023年6月24日 杜のホールはしもと

「シリーズ杜の響き vol.48 森谷真理ソプラノ・リサイタル」

ピアノ：河原忠之

曲目：シューベルト作曲 “夜と夢”、“ます”、“野ばら”、“糸を紡ぐグレートヒェン”、“ガニューメート”、“アヴェ・マリア”、
ヴェルディ作曲 歌劇『オテロ』より”柳の歌～アヴェ・マリア”、バッリーニ作曲 歌劇『ノルマ』より”清らかな女神よ”、プッチーニ作曲 歌劇『ラ・ボエーム』より”私が

街を歩けば” (ムゼッタのワルツ)、シャルパンティエ作曲 歌劇『ルイーズ』より”その日から”、ドヴォルザーク作曲 歌劇『ルサルカ』より“月に寄せる歌”

2023年6月9日 トッパンホー

ル「Viva Verdi! III 後期」

共演：大西宇宙 ピアノ：河原忠之

曲目：ヴェルディ後期作品

2023年7月15日 名古屋学院・クリン・メモリアルホール

「名古屋学院サマーコンサート」

ピアノ：岩渕慶子

曲目：ヘンデル作曲 歌劇『セルセ』より”オンブラ・マイ・フ” 歌劇『リナルド』より”私を泣かせてください”、プッチーニ作曲 歌劇『トスカ』より”歌に生き、恋に生き”
他

2023年7月19日 サントリーホール ブルーローズ

「音夏 おんなつ 2023」

共演：樋口達也 ピアノ：河原忠之

曲目：ヘンデル作曲 歌劇『アタランタ』より”いとしの森よ”他

2023年8月6日 新国立劇場 住友生命いずみホール

「佐藤正浩プロデュース・オペラ プレ・コンサート『フランス・オペラに恋して』」

指揮・ピアノ：佐藤正浩 共演：池田香織、宮里直樹、甲斐栄次郎

合唱：神戸市混声合唱団

曲目：G. ビゼー作曲 歌劇『真珠とり』より”燃えたぎる砂浜の上で”、F. プーランク作曲 歌劇『カルメル会修道女の対話』より”お父様、取るに足らない出来事ではありません”、マスネ作曲 歌劇『タイース』より”私は美しいと言って” 他

2023年8月26日 洗足音楽大学 シルバーマウンテン 1F 「SENZOKU GAKUEN 100th ANNIVERSARY

プレミアムコンサート “Brahms Quartette vol.1 愛の歌”」

ピアノ：高田絢子 共演：藤井麻美、中嶋克彦、加来 徹

合唱：神戸市混声合唱団

曲目：ブラームス作曲 “Verzicht, O Herz, auf Rettung Op.65”、“Drei Quartette Op.64”、

"Liebeslieder-Walzer Op. 52"、"Du bist wie eine Blume"

シューマン作曲 "Du Ring am meinem Finger"、"Die Lotosblume"、"Widmung"、

"Blaue Augen hat das Mädchen"、"Erste Begegnung"

2023年8月30日 東京芸術劇場 コンサートホール

「パシフィックフィルハーモニア東京 特別演奏会」

指揮：飯森範親

共演：清野友香莉、山下裕賀、小原啓楼、加来徹 ソプラノ I 出演

管弦楽：パシフィックフィルハーモニア東京

合唱：パシフィックフィルハーモニア東京クワイア

児童合唱：世田谷ジュニア合唱団

曲目：信時潔作曲 交響曲『海道東征』

2023年9月2日 ミューザ川崎 シンフォニーホール

「ミューザ川崎シンフォニーホール&東京交響楽団 名曲全集第190回」

指揮：原田慶太楼 共演：森 麻季、大西宇宙

管弦楽：東京交響楽団

曲目：モーツァルト作曲『フィガロの結婚』より“手紙の二重唱”、バースタイン作曲 オペレッタ『キャンディード』より“着飾ってきらびやかに”他

2023年9月17日 高崎芸術劇場 大劇場

「群馬交響楽団 第591回定期演奏会」

指揮：飯森範親

共演：富岡明子、山下裕賀、村上公太、平野 和 ソプラノソロ出演

管弦楽：群馬交響楽団

合唱：群馬交響楽団合唱団

曲目：ヴェルディ作曲『レクイエム』

2023年10月1日 東京文化会館 小ホール

「マリア・カラスの生涯」

共演：山下裕賀、笛田博昭、宮里直樹、池内響 ピアノ：藤原藍子 司会進行：フランコ酒井

曲目：ベッリーニ作曲 歌劇『ノルマ』より二重唱、ヴェルディ作曲 歌劇『椿姫』より“ああ、そはかの人か～花から花へ”他

2023年10月8日、14日、16日 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 中ホール

「<オペラへの招待>モーツァルト作曲『フィガロの結婚』」

指揮・フォルテピアノ：阪哲郎 演出：松本重孝

共演：平欣史、熊谷綾乃、内山建人、山際きみ佳、藤居知佳子、萩原寛明、谷口耕平、福西仁、脇阪法子、大野光星 伯爵夫人役出演

管弦楽：日本センチュリー交響楽団

2023年10月31日 王子ホール

「森谷真理ソプラノ・リサイタル Vol.2 Spirits of Language ～言葉に宿るもの～」

ピアノ：山田武彦

曲目：リリー・ブーランジェ作曲『空の開けたところ』、モーリス・ラヴェル作曲『2つのヘブライの歌』、カロール・シマノフスキ作曲『スウォピェヴニェ』

2023年11月19日、25日

「共同制作オペラ J. シュトラウス II 世作曲『こうもり』」

会場：11月19日 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 中ホール

11月25日 東京芸術劇場

指揮：阪哲郎 演出：野村萬斎

共演：福井 敬、山下浩司、藤木大地、与儀 巧、大西宇宙、アデーレ、晴 雅彦、桂 米團治
ほか ロザリンデ役出演

管弦楽：11月19日 日本センチュリー交響楽団

11月25日 ザ・オペラバンド

2023年11月28日 愛知県芸術劇場 コンサートホール

「じゅうろく プロムナードコンサート 2023」

指揮：田中 祐子

管管弦楽：名古屋フィルハーモニー交響楽団

曲目：プッチーニ作曲 歌劇『ラ・ボエーム』より“私が街を歩けば”、
オンカヴァッロ作曲 歌劇『道化師』より“鳥の歌”、
ヴェルディ作曲 歌劇『椿姫』より“そは彼の人か～花から花へ”他

2023年12月15日 東京芸術劇場 コンサートホール

「読売日本交響楽団 2023/2024 シーズンプログラム 「第九」 特別演奏会」

指揮：ヤン＝ウィレム・デ・フリーント

共演：山下裕賀、アルヴァロ・ザンブラーノ、加藤宏隆 ソプラノソロ出演
合唱：新国立劇場合唱団
管弦楽：讀賣日本交響楽団
曲目：ベートーヴェン作曲 『交響曲第9番「合唱付き」』

2023年12月17日 横浜みなとみらいホール
「読売日本交響楽団2023/2024 シーズンプログラム 横浜マチネーシリーズ」
指揮：ヤン＝ウィレム・デ・フリーント
共演：山下裕賀、アルヴァロ・ザンブラーノ、加藤宏隆 ソプラノソロ出演
合唱：新国立劇場合唱団
管弦楽：讀賣日本交響楽団
曲目：ベートーヴェン作曲 『交響曲第9番「合唱付き」』

2023年12月18日 フェスティバルホール
「読売日本交響楽団 大阪定期演奏会」
指揮：ヤン＝ウィレム・デ・フリーント
共演：山下裕賀、アルヴァロ・ザンブラーノ、加藤宏隆 ソプラノソロ出演
合唱：新国立劇場合唱団
管弦楽：讀賣日本交響楽団
曲目：ベートーヴェン作曲 『交響曲第9番「合唱付き」』

2023年12月19日 愛知県芸術劇場 コンサートホール
「名古屋音楽大学 第46回 オーケストラ定期演奏会」
指揮：松尾葉子
管弦楽：名古屋音楽大学オーケストラ
曲目：プッチーニ作曲 歌劇『蝶々夫人』より”ある晴れた日に”、歌劇『トスカ』より”
歌に生き恋に生き”他

2023年12月20日 サントリーホール
「読売日本交響楽団2023/2024 シーズンプログラム「第九」特別演奏会」
指揮：ヤン＝ウィレム・デ・フリーント
共演：山下裕賀、アルヴァロ・ザンブラーノ、加藤宏隆 ソプラノソロ出演
合唱：新国立劇場合唱団
管弦楽：讀賣日本交響楽団

曲目：ベートーヴェン作曲 『交響曲第9番「合唱付き」』

2023年12月21日 サントリーホール

「読売日本交響楽団 2023/2024 シーズンプログラム 名曲シリーズ」

指揮：ヤン・ウィレム・デ・フリーント

共演：山下裕賀、アルヴァロ・ザンブラーノ、加藤宏隆 ソプラノソロ出演

合唱：新国立劇場合唱団

管弦楽：読売日本交響楽団

曲目：ベートーヴェン作曲 『交響曲第9番「合唱付き」』

2023年12月23日 東京芸術劇場コンサートホール

「読売日本交響楽団 2023/2024 シーズンプログラム 土曜/日曜マチネーシリーズ」

指揮：ヤン・ウィレム・デ・フリーント

共演：山下裕賀、アルヴァロ・ザンブラーノ、加藤宏隆 ソプラノソロ出演

合唱：新国立劇場合唱団

管弦楽：読売日本交響楽団

曲目：ベートーヴェン作曲 『交響曲第9番「合唱付き」』

2024年1月3日 NHK ホール

「第66回 NHK ニューイヤーオペラコンサート」

指揮：沼尻竜典 司会：磯野佑子

共演：砂川涼子、田崎尚美、船越亜弥、森麻季、森谷真理、谷口睦美、藤木大地、笛田博昭、福井敬、青山貴、大西宇宙、黒田博、須藤慎吾、斉木健詞、ジョン・ハオ、妻屋秀和

管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団

合唱：新国立劇場合唱団 二期会合唱団 びわ湖ホール声楽アンサンブル

曲目：楽劇『サロメ』より”どうして私を見てくれないの？”他

2024年1月8日 栃木県総合文化センター

「【栃木県誕生150年記念】煌めく新春！ニューイヤーコンサート 2024 森谷真理ソプラノリサイタル」

ピアノ：山田武彦

曲目：歌劇『ロミオとジュリエット』よりジュリエットのワルツ「私は夢に生きたい」、オペラ『ファウスト』より”宝石の歌”、歌劇『ルイーゼ』より「その日から」、歌劇『道化師』より”鳥の歌”、オペレッタ『メリー・ウイドウ』より”ヴィリアの歌”、オペレッタ

『こうもり』より"チャールダーシュ"、オペレッタ『キャンディード』より"着飾って、
きらびやかに" 他

2024年1月29日 やまぎん県民ホール

「オペラ指揮者 阪哲朗が誘う"演奏会形式オペラシリーズ"Vol.2 ～やまぎん県民ホールシ
リーズ Vol.3 ～『椿姫』」

指揮：阪 哲朗

共演：宮里 直樹、大西 宇宙、小林 由佳、井上 雅人 他 ヴィオレッタ役出演

合唱：山響アマデウスコア

管弦楽：山形交響楽団

【総括】

2023年度、研究としての演奏活動は、狂言師 野村萬斎氏や、落語家 桂米團治氏など、我が国の芸術とのコラボレーションに始まり、ポーランド語、ロシア語、ヘブライ語等の楽曲など、オペラ公演、リサイタル、その他コンサートを通して、上演されることの多くない言語に積極的に取り組んだ。他、高校訪問やロータリークラブでの講演会を通し、学校教育や芸術に関する啓蒙活動を行った。

大学内では、ヴォーカル・アカデミーや学科公開講座などを昨年を引き続き共同発案、運営した。

2023年度 研究活動報告

渡部 真菜

- ① 筆者は、Opera《La Boheme》の”si mi chiamano mimi”と”Donde lieta”とOpera《Madama Butterfly》”Un bel di vedremo”の3曲を大学院の修了試験にむけて研究した。これから曲について筆者の考察を述べる。

《La Boheme》は1896年2月1日にイタリアのトリノ・レッジョ劇場で初演された。

舞台はパリのアパートの屋根裏部屋。クリスマスイヴの夕方、友人たちがカフェに向かう中、ロドルフォは急ぎの原稿を仕上げから行くと1人で部屋に残った。しばらくすると、明かりが消えたので火種が借りたいという若い女性が訪ねてくる。ろうそくに火をつけて送り出すが、落とした鍵を探している間にまた火は消えてしまい、2人は暗い中で、手探りで鍵を探す。ロドルフォは鍵を探し当てるが、ポケットに隠し、彼女に近づいて手に触れ、その冷たさに驚く。「可愛らしい手を温めましょう、暗い中では鍵は見つからないでしょう」と自分の身の上を語り始める。それに女性は「私の名はミミです」と応える。

”Si mi chiamano mimi”では、今まで寂しく1人で生きていたミミは、誰かに自分の事を話せることがとても嬉しかったのではないかと私は思う。この曲の中の、「私の話は短いですが、」の部分では、ミミの謙虚な心が現れている。

また、ミミは貧しい中でも楽しい事を見つける天才だと筆者は思う。冬が終わり、「屋根の上から春が1番に私の所に来てくれる」という発想や、「咲いている花はとても良い匂いなのに、どうして自分の花は香りがしないのだろう」という発想が、生活の中で些細な楽しみや疑問を見つけ出す力がとても長けていると感じる。この1曲で、ミミの豊かな発想力と、表現力が伝わってくる。そんな素敵なミミに、ロドルフォの心は釘付けになったのではないかと思う。

3幕では、街道に続く地獄門の関門前。ロドルフォを探しにやってきたミミは、マルチェッロにロドルフォの居場所を尋ねる。すると、ロドルフォが出てくるのを見かけ、ミミは木陰に隠れる。

ロドルフォがマルチェッロにミミは身体が悪く、自分には治してあげるお金がない、愛だけでは病気は治せないと告げる。それを木陰で聞いていたミミは、驚いてロドルフォの

前にでてしまい、ロドルフォもミミに駆け寄る。ミミは、さよならと告げ、彼の愛の呼び声に嬉しくなって出てきたけれど、もとの生活に戻ると話す。

“Donde lieta”では、主人公の、愛する相手の幸せのために、自ら離れるとすぐ判断できる愛情深さと、真の強さが現れており、ミミが愛するロドルフォに辛い思いをさせないために、自ら住んでいた元の家に戻ると、すぐ決断できたのではないかと私は思う。この曲の中の、「私の引き出しの中にあの金の腕輪とお祈りの本がしまっている。それら全てをエプロンで包んでちょうだい、守衛さんに訪ねてもらおう」という部分から、ミミ自身は本当は別れが辛い、辛い表情を相手に見せないように話す所から、相手への愛情が表現されている。また、この曲の中の「そうだ…」と曲調が変わる所から、ミミの頭の中に浮かびあがるロドルフォとの楽しかった思い出や、愛する人ともう2度と会えないという悲しみが表現されていると感じる。

② Opera《Madama Butterfly》“Un bel di vedremo”オペラ「蝶々夫人」より“ある晴れた日に”

《Madama Butterfly》は、1904年にイタリアのミラノ・スカラ座で初演された。舞台は1904年日本の長崎、蝶々さんの家である。蝶々さんはアメリカに帰国した夫ピンカートンが3年間待ち続けている。「彼は駒鳥が巣につく頃に帰ると言った」と述べ、涙ぐむスズキに同意を求め「帰りを信じましょう」と言う。蝶々さんは「ある晴れた日に港に軍艦が入る。私がこの丘の家で待っているの。彼は坂道を駆け上がってきて、『蝶々さん!』と呼ぶでしょう。私は嬉しさを死なないように、そっと隠れるの。彼は心配して、『可愛い奥さん』と、そう呼ぶに違いないわ。私は心から信じて待っているわ」と、歌う。

筆者はこの曲から、蝶々夫人の愛情表現は、「信じる事」なのではないかと考える。愛した相手が言うことは、絶対間違いないとスズキに言ってしまうほど、愛情深い人なのではないか。相手を心から信じ、帰りを待つことが最大の愛情表現だったのではないかと考える。また、これだけ具体的に、鮮明にピンカートンが帰ってきた想像をスズキに話せることから、ピンカートンを待っていた3年間は、毎日ピンカートンが帰ってきた想像をしながら待ち続けていたのではないかと感じる。曲の中で、「私は行かないの、待つのは辛くないわ」というが、毎日同じ事をずっと考え、待ち続けているのは本当は辛かったのではないかと筆者は考える。この歌から、蝶々夫人の愛情も表現されており、また毎日同じ想像をしながら待つという切なさも感じられる。

③ 筆者はプッチーニの作品を研究して、私生活を生きていて色々な楽しみが増えた。春

になり季節が暖かくなるとミミを思い出し、春の太陽を見ると、愛する人を思い浮かべるようになった。プッチーニの作品を通して、感性が豊かになり、日常がとても楽しくなったように感じる。また、この2つの作品に出てくる女性は、2人ともとても愛情深く、女性の真の強さが、作品の中で表現されていると感じる。プッチーニは、ミミや蝶々夫人のような、強い女性に憧れたのではないかと考える。

- ④ 両作品の女性がとても愛情深い女性であり、どちらも恋人をととても愛していたが、終幕で主人公が死んでしまうことから、筆者が考えるプッチーニの最大の「愛」は、「死」なのではないかと感じる。主人公の「死」が、作品の中で最大の「愛」を表現している部分だったのではないかと筆者は考える。

